

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画年計画の1年目)

1. 研究課題

チベットにおけるコミュニケーションツールの研究

—書簡文化の歴史の変遷と現代的意義—

A study of communication tools in Tibet: Continuity, transition, and expandability of the letter culture in Tibet

2. 研究代表者氏名

池田 巧

IKEDA Takumi

3. 研究期間

2022年4月-2026年3月(1年目)

4. 研究目的

チベットにおける書簡には、インド仏教由来の韻文で綴ったスタイルによる手紙と散文で書かれた手紙の二種類がある。このうち、第二の手紙群には、高僧の手になる手紙や政治文書における手紙などのほか、寺院への支援物資に添えた手紙、古代チベット帝国期の通達文書など様々な書簡が含まれる。これらのチベット語書簡は、書かれた時代や目的のみならず、書き手の立場や社会背景、書体や書式スタイルに至る諸要素において異なる性質を持っている。本研究では、様々な性質を持つ書簡を通覧し分析することで、チベットにおける書簡の類型化に取り組み、その意義を検証する。また、現代社会には書簡のみならずeメールやSNS等のコミュニケーションツールが存在する。これらのツールと書簡との関連や相違を明らかにし、現代社会における書簡の位置付けについて考察する。歴史の当事者たちが綴った文字資料であり、正しく扱えば有益な史料となる書簡を分野横断的かつ通時的に比較・分析し、現代のツールと付き合わせることで、コミュニケーションツールの一媒体である書簡の役割を歴史的文脈で再検証し、複眼的視点からチベット社会を見直すことが本研究の主たる目的である。

There are two types of letters in Tibetan civilization: letters as literature written in verse based on the Indian Buddhistic style and letters as correspondences written in prose. The second group includes various sub-types of letters written by priests, political documents, letters attached to relief supplies to temples, etc. Characteristics of these letters vary in the period, purpose and the writer's social background, which represents style and format. This study will

examine the historical significance of letters in Tibet by classifying and analyzing letters belonging to various periods. This study will also discuss the position of letters in modern Tibetan society by comparing the characteristics of letters to alternative communication tools such as e-mail and SNS. Through these attempts, this study will examine the role of letters as a medium of communication in a historical context and review Tibetan society from a multifaceted perspective.

5. 本年度の研究実施状況

チベット語の書簡について、班員の間で基本的な知識と認識を共有するべく概説的な紹介を含む報告を聞き、分野横断的な討論と検討を行なった。書簡に加えて多様な文書の書式についての研究報告もあり、それぞれのテーマごとに検討を加え、書かれた文書の地域的、時代的な諸特徴についての理解を深めた。チベット語の書簡の書式と内容についての資料のひとつに、青木文教が請来したチベット語の書簡の書き方についてのマニュアルの写本がある。この資料については、これまでに公式に出版されたことがなく、その内容についてもほとんど知られていない。この写本を撮影した写真版に基づき、会読を行うための校本を作成するべくチベット文字の入力を依頼し、デジタルテキストの作成に着手した。また定例の研究集会を対面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、班員各位の先端的な研究成果の報告のほか、ゲストスピーカーから最新の研究報告を聞く機会を得た。

6. 本年度の研究実施内容

2022-04-15 アリアンヌ・マクドナルド著『古代チベットの王権論とソンツェン・ガンポの宗教』の再検討 発表者 今枝由郎 ころの未来研究センター 特任教授

2022-05-21 チベットにおける書簡の発展史 発表者 ドルジェ・ツェテン 青海民族大学
『チベット幻想奇譚』を読む 発表者 星泉 東京外国語大学 発表者 海老原志穂 東京外国語大学 発表者 三浦順子

2022-06-18 30 年前の設問に対して提出されてきた解答例－右筆弟子による聞き書き著述と推敲作業が起こす齟齬 発表者 小野田俊蔵 佛教大学名誉教授 タワンにおける環境運動とデジタルメディア－ダライ・ラマ六世の詩と現代の交錯 発表者 長岡慶 東京大学／学振研究員

2022-10-22 古代チベットにおける手紙文化とその広がり 発表者 岩尾一史 龍谷大学

2022-11-19 Transmission on Tibetan among the Tangut 発表者 Kirill Solonin 中国人民大学

2022-12-17 トリン寺仏塔から発見された古文書について 発表者 旗手瞳 龍谷大学・日本学術振興会 民族走廊と羌族の社会文化——建築を例として 発表者 張曦 中央民族大学

2023-03-04 Tibetan Studies in Japan Foundational Bases of Tibetan Studies in Japan 発表者 ONODA Shunzō (小野田俊蔵) 佛教大学 Japanese Research on Post-Imperial Tibet:

Medieval Tibet and the History of Buddhism 発表者 IUCHI Maho (井内真帆) 京都大学
The Rising Sun of the Great Perfection: rDzogs chen Studies in Japan 発表者 Marc-Henri
DEROCHE 京都大学 From Kokka-taikan 国歌大観 to OTDO (Old Tibetan Documents
Online) 発表者 IMAEDA Yoshiro (今枝由郎) CNRS/京都大学 Historical studies of the
Old Tibetan Empire in Japan and Its Features 発表者 IWAO Kazushi (岩尾一史) 龍谷大
学

2023-03-05 Tibetan Studies in Japan Historical Studies of Qing Dynasty Relationship with
Tibet in Japan 発表者 KOMATSUBARA Yuri (小松原ゆり) 明治大学 (非常勤)
Contemporary Japanese Research Trends in Early-Twentieth-Century Japan-Tibet Relations
発表者 KOBAYASHI Ryosuke (小林亮介) 九州大学 Modern Tibetan Studies in Japan:
Anthropology, Social History, and Political Science 発表者 OKAWA Kensaku (大川謙作)
日本大学 Tibetan Linguistics in Japan and Its Historical Developments 発表者 EBIHARA
Shiho (海老原志穂) 東京外国語大学 Around Tibetology in Japan: From the Perspective of
Exploration and Journalism 発表者 IKEDA Takumi (池田巧) 京都大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

池田巧、西田愛、中西竜也、稲葉穰

学内

井内真帆(白眉センター・文学部)

学外

星泉(東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所)、根本裕史(広島大学大学院文学研究
科)、海老原志穂(東京外国語大学・日本学術振興会)、山本達也(静岡大学人文社会科学部)、
小林亮介(九州大学比較社会文化研究院)、岩田啓介(筑波大学人文社会系)、長岡慶(東京大
学・日本学術振興会)、岩尾一史(龍谷大学文学部)、大川謙作(日本大学文理学部)、別所裕介
(駒沢大学総合教育研究部)、山本明志(大阪国際大学経営経済学部)、小西賢吾(金沢星稜大
学人文学部)、小野田俊蔵(佛教大学)、三宅伸一郎(大谷大学)、小松原ゆり(明治大学文学
部)、村上大輔(駿河台大学現代文化学部)、加納和雄(駒澤大学仏教学部)、池尻陽子(関西大
学文学部)、旗手瞳(龍谷大学・日本学術振興会)、ガザンジェ(東洋文庫・日本学術振興会)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		7 (2)	2				30 (16)	4			
国立大学	5	5 (3)		2 (1)		3 (3)	28 (13)		6 (2)		3 (3)
公立大学	1	1				1	4				7
私立大学	9	12 (3)		1 (3)			53 (17)		6 (6)		
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	1	1	1				5	5			
民間機関											
外国機関	1		2 (1)					3 (2)			
その他 ※	0	1 (1)	1 (1)				1 (1)	1 (1)			
計	17	27 (9)	6 (2)	3 (4)	0 (0)	4 (3)	121 (47)	13 (3)	12 (8)	0 (0)	10 (3)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名 (必須)	掲載論文数 (必須)	掲載年月日 (必須)	論文名 (必須)	発表者名 (必須)
1	『アジア・アフリカ言語文化研究』105号	1	R5.3	「ミボー (mibogs) 再論:チベット旧社会における『人身賃借制度』とその特質をめぐって」	大川謙作
2	『仏教学会紀要』28号	1	R5.3	「(最終講義録) ダライラマ六世の恋愛の詩」	小野田俊蔵
3	『語学研究所論集』第27号	1	R4.10	「アムド・チベット語における受動表現」	海老原志穂・ <u>拉加本</u>
4	『日本西藏学会々報』68号	1	R5.3	「1750年チベット政変前夜の清朝・チベット・青海モンゴル関係:ギルメ=ナムギェル家の婚姻をめぐって」	岩田啓介
5	『文書・出土・石刻史料が語るユーラシアの歴史と文化』	1	R5.3	「摂政テモ=ホトクト晩年のサムイェー僧院修繕事業について」	池尻陽子

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	

13. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画

今年度に引き続き、班員各位が研究を進めているチベット語の書簡をはじめとする多様な文書の書式と内容について報告を重ね、それぞれのテーマごとに検討を加えて、書かれた文書の地域的、時代的な諸特徴についての理解を深めるべく分野横断的な討論と検討を行なっていく。青木文教が請求したチベット語の書簡の書き方についてのマニュアルの写本については、会読を行うための校本を作成するべく、チベット文字の入力を進め、デジタルテ

キストとしての編集と整理を加える。定例の研究集会はこれまで同様に対面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、チベット学の諸分野における班員各位の先端的な研究成果を報告してもらい、ゲストスピーカーを招いて最新の研究報告を聞く機会を設ける。

15. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10	10	360000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				
消耗品等経費				40000
その他				
合計				400000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

最終的には研究成果報告書の論集を刊行することを目標に、研究報告を積み重ね、批判的な検討を加えていきたい。班員並びにゲストの報告者は、これまでに研究班の例会で行なった報告をもとに文章化して論文の執筆を進めていく。